
待ち人には、雪傘をさして。

蒼桐隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

待ち人には、雪傘をさして。

【Nコード】

N0775D

【作者名】

蒼桐隼人

【あらすじ】

待つなんて、もうやめろよ。そう言ってやりたいのに。

（前書き）

本作品はなろう作者白狼さんの『約束は、時計の針が何周しても。』
を読んでより、成り立っています。未読の方は、そちらから読んで
頂くといいそう楽しめると思います。

腕時計の針の位置を横目で確認しながら、彼女はいつも赤い手袋を口もとに当てて、寂しい息を吐く。

かたかたと震える小さな肩。つい漏れ出る溜め息。そのどちらも、雑踏を行き交う人の波に紛れていつてしまう。

駅前の白い恋人達の鮮やかなイルミネーションも、はらはら舞う粉雪も、彼女の胸の隙間を埋めてはくれない。

それでも彼女は今週もあの場所で待っている。

どれだけ待っても来ない誰かを、時計の針が何周しても。

そんな話をすっかり親友の前でこぼしてしまつたら。

「お前もそうとうだぜ」

なんて、全てを見透かしたような目で、にやにや笑われた。

クリスマスの日の、ゲーセンからの帰り道。特定の誰かとの予定なんて当然なくて。数人のダチとあてもなく出歩いて、くだらねえことで笑って、騒いで。それで終わりにするはずだったのに。

胸でつかえたままの言葉が、強く心臓を締め付けて痛い。

イベントのバイトで、駅前のショーウィンドーに豆電球の装飾を取り付けていた、あの日。俺は彼女を見つけた。その日から毎週、あの場所に立つことを知った。待つ誰かが来ないことも。

この痛みになんかあるのなら、もしかしたら恋ってやつかもしれない。けど俺はもう苦しいのは嫌なんだ。

「いいからさっさと帰ろうぜ。気になるなら、カサぐらい貸してやつてくりやいいだろ」

東北地方の天気は崩れやすい。しんしんと降る雪が、ふとした拍子には雨に変わり、アスファルトを濡らす。

「でも傘がねえんだよ」と白状すると、いよいよ腹を抱えて笑い出した。ふん、男の友情なんてこんなもんさ。

だからもう、待つなんてやめろよ。隙間から吹く風は冷たいし、凍えるほどの想いをして待つ道理なんてないだろ。

そう、言ってやりたいのに。

「私折りたたみの力サ持つてるよ。これ、貸してあげなよ。何ならあげちゃってもいいよん」

「いいんすか、アカネさん。どうもっす」

俺もいつかアカネさんが自分に傾いてくれるのを待っているだけだから、踏み出せない。

「代わりに今度新しいの買つてよ。ねえ、マサシ」

ポケットに突っ込まれていた親友の腕に、アカネさんの腕が絡まる。温かい。

でも、残酷だ。

「なんで俺なんだよ。もうお前、いいから行ってこい。置いてくぞ」
「ああ、すぐ戻る」

想いの置き場所に困って、ただ日常を消化していく。

でもきつと、これでいい。黒のダウンに舞い降りた白い雪が溶けていくように。

借りた力サを片手に俺が走り出すのと、彼女がいつもの場所から一歩歩き出したのは同時だった。

目を凝らしていても、瞬く間に彼女は人の波と白い世界に吸い込まれていく。

また来週も待っているかどうかなんて、分からない。だから今手を伸ばす。

「待つて！」

掛け声と突然掴まれた腕に驚いて、振り向いた彼女。

喉が酸素を求めて熱をもつ。

「なんですか」

まるで不審者を見るような鋭い視線を浴びる俺。でもいつも彼女

の肩が次第に落ちていく様も知っているから。

「いや、あの。コレ……ずっと待つのも、つらいだろ。だからさ」
差し出したカサは薄い水色。晴れた空と同じ優しい色。彼女の毛糸の手袋には合わない。

「余計なお世話だったら、捨ててくれていいんだ。でも俺、あんたを応援したくて。来週も、待つんだろ」

流れる沈黙。

こうしている今も白い粒が大きくなっていく。

足元を見つめ考え込んでいた彼女が、赤い毛糸を一度口元にやった時だった。

「ありがとう」

赤い手袋がカサを受け取った。微笑んでいた。

その表情はまだ寂しそうで睫毛も震えていたけど、ほんの少しだけ安心した顔で。

明日も待てるんだ。

「それ、返さなくていいから。それじゃ」

踵を返してまた走り出す。でも足音はどこか軽快だった。

ダチは俺を待っていてくれたらしく、小言を言いつつ迎えてくれた。

そして誰かが「帰るか」と振り返った時。彼女の赤い手袋はもう見つけれなかった。

代わりに、交差点を渡る人の群れの中に水色のカサが小さくなって消えていくのが見えた。

END

（後書き）

私は待つよりも、待たせてしまう方です。でも待つのは嫌いじゃないです。根気よく待て、とは言いません。ただ待っている時間に、意味や価値がないなんて思わないで。そんな思いで書きました。

ここまで読んでくださった貴方と、執筆するきっかけとなった白狼さんに感謝を込めて。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0775d/>

待ち人には、雪傘をさして。

2010年10月14日12時30分発行